

ご挨拶

2021年8月1日より当教室に着任をして、はや2年が過ぎました。2023年の5月8日から新型コロナウイルス感染症の感染症法上の位置付けが5類感染症になりました。法律に基づき行政が様々な要請・関与をしていく仕組みから、個人の選択を尊重し国民の皆様の自主的な取組をベースとした対応に変わり、ようやくコロナ流行前の社会生活が戻ってきました。この2年間のCovid-19禍の期間で家族を対象にケアに携わってきた看護職、研究者の取り組み、工夫してきて得たものは大きかったと思います。

家族看護学は、家族員の健康問題、発達課題、また家族が直面する様々なライフサイクル上に起こり得るイベントによって脆弱性が高まった時に、その家族全体を看護の対象とし、家族が本来持っている力を高めるように支援し、ケアを実践する学問です。教室では教員、客員研究員、大学院生など、ヘルスケア・看護に対する高い志とパッションを有するメンバーが集まり、患者とその家族に資する看護実践、家族看護学研究に取り組んでおります。

研究では、家族形成期（周産期）のメンタルヘルス、小児がんをもつ子どもと家族、小児慢性疾患患者のトランジション、家族の中でおきる暴力の影響に関する研究を4つの柱として、家族がその発達段階で直面する課題に対峙するためのレジリエンスを高める研究を推進しています。研究や教育を通じて、家族のレジリエンスを高め、家族が様々な危機から成長していけるように、家族を元気にしていけるよう、教室員一同、引き続き努力して参ります。

日頃よりグローバルな舞台において研究成果を発信したり、共同研究活動につながるようにと努めてまいりました。2023年もまた、国外の研究者・専門家の先生方を教室に向かえることができました。5月に Denise M. Saint Amault 先生（University of Michigan School of Nursing）、Laura Sinko 先生（Temple University College of Nursing）、7月には Chiyong Cha 先生（梨花女子大学）、9月には Edward Chan Ko Ling 先生（The Hong Kong Polytechnic University）、12月には Chia-Chin Lin 先生（Hong Kong University）をお迎えしました。それぞれの先生方には、大学院教育（ゼミ）のほか、教室員の研究指導をしていただいたり、今後の共同研究の相談をしたりする機会を得て、さらなる研究の連携を進めることができました。私をはじめ教室員もアメリカ、韓国と研究会議や学術集会への参加のための国外出張を積極的に再開しております。

教室員の異動としましては、2022年4月から家族看護学教室の一員としての活動に加わっていたグローバルナーシングリサーチセンター特任講師の戸部浩美先生が、2023年4月に石川県立看護大学の小児看護学教室教授にご栄転されました。後任に山路野百合先生が特任助教として2023年4月から教室の一員として加わってくださいました。2024年4月には、講師のキタ幸子先生がグローバルナーシングリサーチセンターの特任研究員と着任され、日本医療研究開発機構（AMED）へ出向していた佐藤伊織先生が講師として戻ってこられました。特任助教の山路野百合先生は昭和大学にご栄転され、後任には村本美由希先生（グローバルナーシングリサーチセンター兼任）が家族看護学分野の教育・研究の一員としての加わりました。さらに、2024年4月からは新しく修士課程に3名を迎え、大学院生は6名（修士6名）になります。また、客員研究員6名も加わり、スタートしました。

ここに、2023年4月から2024年3月までの活動報告をまとめました。

教室員一同、時代とともに変化する、社会からの看護への期待にアンテナをはり、新たな看護学、家族看護学の展開に向けて歩いていく教室でありたいと思います。

今後ともご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

2024年4月

東京大学大学院医学系研究科家族看護学分野

教授 池田 真理

目 次

ご挨拶

1. 研究活動

1-1. 学術研究業績 3

1-2. 研究費 9

1-3. 学内外の公的活動 10

1-4. 国際活動 12

2. 学位論文（卒業論文・修士論文・博士論文） 20

3. 教室カンファレンス 21

4. 家族看護学教室研究会 26

5. 教育活動（担当講義・実習） 27

資料（卒業論文・修士論文・博士論文） 29

家族看護学教室 教室員（令和5年度）

1. 研究活動

1-1. 学術研究業績

論文（原著論文・総説）

Morishita-Kawahara M, Harasawa N, Sakai S, Ikeda M, Watanabe K, Nagae H. Advance care planning practice among citizens in Japan: A cross-sectional study. Japan Society for End-of-Life Care. 2023 Mar; 7(1): 16-25. <https://doi.org/10.57506/jseolc.070101>

Anderson J.G, Chesla C.A, Fukahori H, Sakka M, Honda J, Ikeda M. Japanese and U.S. Cultural exchange: Caring for aging family members in the community. Journal of Family Nursing. 2023 Dec; 30(1): 3-6. <https://doi.org/10.1177/10748407231222687>

Sakai S, Ikeda M, Kondo Y, Fujii A, Itabashi M. Utility of the admission/discharge patient flow management system at the acute care hospital. Journal of International Nursing Research. 2023. (in press)

清水裕子, 池田真理. 看護管理者のマネジメント過程に沿ったがん看護専門看護師への関わりーがん看護専門看護師の理解との比較ー. 東京女子医科大学看護学会誌. 2023; 18(1): 1-10.

川端京子, 池田真理. ジェネラリスト・ナースの卓越した看護実践とその獲得に至る背景ー患者のニーズに応えられたという手応えのある経験のインタビューから. 日本看護科学学会誌. 2023. (Accepted)

田中幸子, 西垣昌和, 小山田恭子, 石橋みゆき, 池田真理, 勝田美穂, 野村陽子. 看護基礎教育における教育プログラムに必要な政策コンピテンシー〜デルファイ法を用いた調査結果から〜. 日本看護科学学会誌. 2023. (Accepted)

Kita S, Sinko L, Koutra K, Saint Arnault D. Development of the Self-Assessment for Trauma Recovery Tool (START) for survivors of gender-based violence: Classification using latent class analysis. Psychology of Violence. 2024 Feb. (Accepted)

Kikuchi R, Sato I, Hirata Y, Sugiyama M, Iwasaki M, Sekiguchi H, Sato A, Suzuki S, Morisaki-Nakamura M, Kita S, Oka A, Kamibeppu K, Ikeda M, Kato M. Fact-finding survey of doctors at the departments of pediatrics and pediatric surgery on the transition of patients with childhood-onset chronic disease from pediatric to adult healthcare. PLoS ONE. 2023 Aug; 18(8): e0289927. <https://doi.org/10.1371/journal.pone.0289927>

Yamaji N, Kobayashi K, Hasegawa D, Ota E. Developing and evaluating a cancer communication picture book for children, families, and healthcare professionals: A mixed methods feasibility study. Asia-Pacific Journal of Oncology Nursing. 2024 Jan; 11(1): 100345. <https://doi.org/10.1016/j.apjon.2023.100345>

Nishio H, Ohde S, Yamaji N, Takahashi O. Factors associated with patients' ratings of hospitals among Japanese inpatients: A cross-sectional study. JMA J. 2023 Apr; 6(2): 148-155. <https://doi.org/10.31662/jmaj.2022-0176>

Hamada H, Ninohei M, Yamaji N, Ota E. Effects of interventions for menstrual health and hygiene management for adolescent girls: A systematic review and meta-analysis. Pacific Rim International Journal of Nursing Research. 2024; 28(2). (Accepted)

Oshiro R, Soejima T, Kita S, Benson K, Kibi S, Hiraki K, Kamibeppu K, Taku K. Reliability and

validity of the Japanese Version of the Short Form of the Expanded Version of the Posttraumatic Growth Inventory (PTGI-X-SF-J): A Cross-sectional study. *International Journal of Environmental Research and Public Health*. 2023 May; 20(11): 5965.
<https://doi.org/10.3390/ijerph20115965>

Oshiro R, Tanabe M, Tada K, Takei J, Yamauchi H, Warita Y, Kamibeppu K. Post-traumatic growth and cancer-related communication among adolescents having mothers with breast cancer. *Supportive Care in Cancer*. 2023 Jul; 31(7): 446.
<https://doi.org/10.1007/s00520-023-07915-z>

大城 怜, 上別府 圭子. 母親の乳がん罹患にともなう思春期の子どもの困難 —質問紙調査の自由記述の分析から—. *家族看護学研究*. 2023; 29: 27-36.

佐藤伊織, 藤岡寛, 松澤明美, 涌水理恵. 家族エンパワメント尺度短縮版の作成. *厚生*の指標. 2023 Apr; 70(4): 23-27.

論文（依頼原稿など）

池田真理. 第 26 回東アジア看護学研究フォーラムを終えて. *週刊医学会新聞（看護号）*. 2023 May; 29(3519): 5.

学会・研究発表

Asaoka Y, Kawakami C, Yosida M, Kato T, Watsuji T, Honda J, Ikeda M. Report on support by nurse specialists in family health nursing for cancer patients and families treated at Home. 16th International Family Nursing Conference, June 20-23, 2023, Dublin, Ireland.

de Montigny F, Landry I, René C, Gervais C, Brødsgaard A, Polita N, Alvarenga W.D.A, Somanadhan S, Sheppard-Lemoine D, Ikeda M, Nascimento L.C. Attitudes, beliefs, and sense of efficacy of nurses intervening with fathers of young children: A qualitative systematic review. 16th International Family Nursing Conference, June 20-23, 2023, Dublin, Ireland.

池田真理, 佐藤伊織, 津村明美. 患者・介護者へのアンケート調査報告. 第 1 回脳腫瘍支持療法研究会, 2023 年 7 月 22 日, 東京都文京区.

河合麻衣子, 三好麻実子, 山内典子, 渡邊直美, 内田朋子, 原美鈴, 小泉雅子, 池田真理. COVID-19 の影響で臨床実習が制限された新人看護師に対する先輩看護師の認識と新人看護師への支援. 第 27 回日本看護管理学会学術集会, 2023 年 8 月 25-26 日. 東京都千代田区.

河合麻衣子, 山内典子, 安田妙子, 小泉雅子, 原美鈴, 池田真理. COVID-19 の影響で臨床実習が制限された新人看護師の経験. 第 27 回日本看護管理学会学術集会, 2023 年 8 月 25-26 日. 東京都千代田区.

野村陽子, 石橋みゆき, 小山田恭子, 池田真理, 田中幸子, 西垣昌和, 加藤典子. 交流集会: 看護系大学における政策教育プログラム導入の試みと評価指標の検討. 第 43 回日本看護科学学会学術集会, 2023 年 12 月 9-10 日, 山口県下関市.

Morisaki M, Aihoshi K, Suzuki S, Watsuji T, Ikeda M. Surrogate decision-making among families: A scoping review. 16th International Family Nursing Conference, June 20-23, 2023, Dublin, Ireland.

新井陽子, 森崎真由美, 渡邊美穂, 岩崎美和, 道畑祥子, 佐藤敦志, 星野 愛. 思春期の二分脊椎

患者における移行準備性と症状・患者の疾患理解との関連の検討. 第 40 回日本二分脊椎研究会, 2023 年 7 月 8 日, 福岡県福岡市.

Yamaji N, Kobayashi K, Hasegawa D, Ota E. Developing and evaluating a cancer communication picture book for children, families, and healthcare professionals: A mixed methods feasibility study. 27th East Asian Forum of Nursing Scholars, Mar 6-7, 2024, Hong Kong.

二田水彩, 山路野百合, 大田えりか. キリバス共和国の看護師を対象とした実践的問題解決プログラムの実施可能性. 第 43 回日本看護科学学会学術集会, 2023 年 12 月 9-10 日, 山口県下関市.

Muramoto M, Tobe H, Ikeda M. Self-compassion facilitators, barriers, and outcomes among fathers in the context of parenting: A scoping review protocol. 16th International Family Nursing Conference, June 20-23, 2023, Dublin, Ireland.

Shimoyama Y, Tokumura A, Hori S, Yamaji N, Ikeda M. Facilitators and barriers affecting inclusive education for children with physical disability at school in Japan: A scoping review. 27th East Asian Forum of Nursing Scholars, Mar 6-7, 2024, Hong Kong.

下山結衣, 森崎真由美, 池田真理. 未就学児向け多様性への寛容さ尺度開発に向けた予備的研究. 第 70 回日本小児保健協会学術集会, 2023 年 6 月 16-18 日, 神奈川県川崎市.

講演・シンポジウムなど

Ikeda M, Kobayashi K, Feetham S, Morisaki M, Katchamat N, Imai Y. Pre-conference Workshop: Career cartography to find your destination to enhance the practice and family. 16th International Family Nursing Conference, June 20-23, 2023, Dublin, Ireland.

Ikeda M (Moderator). Oral session: Conversations and communication for Family Healing. 16th International Family Nursing Conference, June 20-23, 2023, Dublin, Ireland.

Ikeda M. Welcoming Address. 27th East Asian Forum of Nursing Scholars, Mar 6-7, 2024, Hong Kong.

Ikeda M (Moderator). Award Candidate Oral Presentation. 27th East Asian Forum of Nursing Scholars, Mar 6-7, 2024, Hong Kong.

Ikeda M, Lin C. Symposium 3: Doctoral nursing education in East Asian region. 27th East Asian Forum of Nursing Scholars, Mar 6-7, 2024, Hong Kong.

池田真理 (講演). アタッチメント・スタイル面接・日本版 (ASI-J) トレーニング・コース 1. ASI-J 研究会, 2023 年 5 月 7 日, オンライン.

池田真理 (講演). 家族看護論・家族看護学概論・家族看護学の基礎理論. 東京女子医科大学看護学部講義 (3 年生), 2023 年 6 月 6 日, 東京都新宿区.

池田真理 (講演). その看護すごい! に名前をつけてみよう. 第 19 回日本クリティカルケア看護学会学術集会, 2023 年 7 月 2 日, 東京都江戸川区.

池田真理, 佐藤伊織, 津村明美 (シンポジウム). 研究会発足特別企画: 患者・介護者へのアンケート調査報告. 第 1 回脳腫瘍支持療法研究会, 2023 年 7 月 22 日, 東京都文京区.

池田真理（講演）．教育講演 1：患者家族の抱える苦しみとそのケアについて．第 1 回脳腫瘍支持療法研究会，2023 年 7 月 22 日，東京都文京区．

嵐弘美，山内典子，異儀田はづき，寺岡征太郎，池田真理（シンポジウム）．インフォメーション・エクスチェンジ：事例検討を事例研究として発表する仕掛けづくり～専門看護師の実践知の伝播・継承を促進する事例検討モデル～．第 27 回日本看護管理学学術集会，2023 年 8 月 25-26 日，東京都千代田区．

河合麻衣子，山内典子，小泉雅子，原美鈴，池田真理（シンポジウム）．インフォメーション・エクスチェンジ：「意図的な対話の場」を活用した新人看護師支援～コロナ禍での経験を踏まえて～．第 27 回日本看護管理学学術集会，2023 年 8 月 25-26 日，東京都千代田区．

川端京子，今井洋子，廣川友香，清水裕子，岡本恵子，小川明佳，福井純子，國江慶子，池田真理．（インフォメーション・エクスチェンジ）：キャリア・カルトグラフィの取り組みを通して自身のキャリアの目的地を再考する．第 27 回日本看護管理学学術集会，2023 年 8 月 25-26 日，東京都千代田区．

池田真理（講演）．キャリア・カルトグラフィー～実践と研究を統合し目的地を目指す～．愛知医科大学大学院看護研究科特別講義，2023 年 9 月 2 日，愛知県長久手市．

荒木曉子，池田真理（座長）．一般社団法人日本家族看護学会理事会企画 30 周年シンポジウム．日本家族看護学会第 30 回学術集会，2023 年 9 月 9-10 日．大阪府吹田市．

池田真理（座長），植木慎悟，山本弘江，佐藤伊織（講演），Edward K.L. Chan．シンポジウム：家族内の関係性をめぐる研究方法を探る－研究デザインとデータ収集の工夫から学ぶ－．日本家族看護学会第 30 回学術集会，2023 年 9 月 9-10 日．大阪府吹田市．

小林京子，池田真理（シンポジウム）．交流集会：あなたの実践・研究・教育の目的地を定め、キャリアを描くキャリア・カルトグラフィー：描いてみよう．第 28 回聖路加看護学会学術大会，2023 年 9 月 18 日，オンライン．

池田真理，中村美鈴，グレッグ美鈴，金井 Pak 雅子，高井ゆかり，竹之内沙弥香，操 華子，成瀬和子，宮本有紀，柳澤 理子（シンポジウム）．交流集会：From Struggle to Success：「若手研究者が海外留学するための助成」経験者から学ぶ．第 43 回日本看護科学学会学術集会，2023 年 12 月 9-10 日，山口県下関市．

野村陽子，石橋みゆき，小山田恭子，池田真理，田中幸子，西垣昌和，加藤典子（シンポジウム）．交流集会：看護系大学における政策教育プログラム導入の試みと評価指標の検討．第 43 回日本看護科学学会学術集会，2023 年 12 月 9-10 日，山口県下関市．

Kita S．The Self-Assessment of Trauma Recovery (START): Latent Class analysis. Multicultural Study of Trauma Recovery (MiStory) Consortium. Hellenic Mediterranean University, Heraklion. Oct 18, 2023, Greece.

Kita S (Panelist). Health Perspectives, Thinking Globally: Gender-based Violence. Temple University College of Public Health, Mar 13, 2024, Online.

キタ幸子（講演）．混合研究法の基礎と実際—ジェンダーに基づく暴力のリカバリープロセスに関する研究を一例に—．茨城県立医療大学看護研究セミナー「質的研究と量的研究の融合—混合研究法の実践例」，2023 年 6 月 1 日，オンライン．

キタ幸子（講演）．妊娠期のパートナーからの暴力（IPV）に関する研修．第 31 回福岡母性衛生学会学術集会主催研修会, 2023 年 7 月 2 日, 福岡県福岡市.

キタ幸子（講演）．家族の暴力を予防・終結する—子ども虐待予防に向けた研究の実際—. 石川県立看護大学 子どもと家族の保健医療福祉概論, 2023 年 7 月 4 日, オンライン.

キタ幸子（講演）．階層化する社会の家族と健康—家族内の暴力の連鎖をとらえる—. 第 22 回日本看護科学学会セミナー（オンデマンド配信）, 2023 年 7 月 23 日, オンライン収録.

キタ幸子（講演）．妊娠中の母親と子どもへの DV—発見と対応の基礎知識—. 2023 年度とうきょう子育て応援パートナー事業, 2023 年 7 月 31 日, 東京都文京区.

キタ幸子（講演）．家族の暴力を予防・終結する—トラウマリカバリーに向けた混合研究の実際—. 日本赤十字秋田看護大学 フォレンジック看護特論, 2023 年 9 月 4 日, オンライン.

キタ幸子（講演）．家族の暴力を予防・終結する—子ども虐待の予防に向けた地域参加型研究の実際—. 日本赤十字秋田看護大学 フォレンジック看護特論, 2023 年 9 月 4 日, オンライン.

キタ幸子（講演）．妊娠中の母親と子どもへの DV—発見と対応の基礎知識—. 江東区深川南部保健相談所 助産師合同研究会, 2023 年 9 月 25 日, 東京都江東区.

キタ幸子（講演）．妊娠中の母親と子どもへの DV—発見と対応の基礎知識—. 第 37 回日本助産学会学術集会, 2023 年 10 月 9 日, 東京都中央区.

キタ幸子（講演）．家族の暴力を予防・終結する—子ども虐待の予防に向けた地域参加型研究の実際—. 九州大学地域母子保健論I, 2024 年 1 月 9 日, オンライン.

キタ幸子（講演）．妊娠中の母親と子どもへの DV—発見と対応の基礎知識—. 東京ウィメンズプラザ令和 5 年度職務関係者研修, 2024 年 3 月 12 日, オンライン.

森崎真由美（講演）．小児看護学. 神戸大学医学部看護学専攻講義（3 年生）, 2023 年 5 月 18 日, オンライン.

森崎真由美（講演）．家族をどうとらえるか—理論を用いて家族を理解する—. 第 59 回日本小児循環器学会学術集会, 2023 年 7 月 6-8 日, 神奈川県横浜市.

本田淳子, 新家一輝, 島田なつき, 相墨生恵, 山口智治, 森崎真由美, 中口尚始, 藤井淳子, Petra Brysiewicz. 国際交流委員会企画: 急性期領域における家族の意志決定支援—日本とアフリカの比較から見えるもの. 日本家族看護学会第 30 回学術集会, 2023 年 9 月 9-10 日. 大阪府吹田市.

森崎真由美（講演）．先天性心疾患患者の成人移行期支援における小児科・循環器内科および多職種連携. 第 25 回日本成人先天性心疾患学会総会・学術集会, 2024 年 1 月 6-8 日, 東京都千代田区.

山路野百合（講演）．コ克蘭ジャパントイトル登録ワークショップ. 2023 年 7 月 27 日, オンライン.

山路野百合（講演）．コ克蘭ジャパンタイトル登録ワークショップ．2024 年 1 月 27 日，聖路加国際大学．

山路野百合（講演）．私立看護系大学協会研究セミナー．私立看護系学協会，2024 年 2 月 3 日，オンライン．

佐藤伊織，古瀬みどり，山本真実，中山美由紀，松澤明美，入江亘，柄澤清美，河原美紀，中嶋祥平，戸部浩美，米澤かおり（うち、話題提供者：佐藤伊織，中嶋祥平，大城怜，山本真実）．編集委員会企画：査読者との対話から投稿論文を精錬するポイントを理解しよう．日本家族看護学会第 30 回学術集会，2023 年 9 月 9-10 日．大阪府吹田市．

小林京子，川上千春，法橋尚宏，藤岡寛，大城怜，小野美雪，小野若菜子，山本則子，篠崎智大．研究促進委員会企画：2 者関係データを用いて家族ユニットを捉える研究をするための分析方法．日本家族看護学会第 30 回学術集会，2023 年 9 月 9-10 日．大阪府吹田市．

Hori S. Introduction of my research. Spring International Program, Mar 12, 2024, Tokyo, Japan.

Shimoyama Y. Self-introduction & my research. Spring International Program, Mar 12, 2024, Tokyo, Japan.

Tokumura A. Research introduction. Spring International Program, Mar 12, 2024, Tokyo, Japan.

受賞

池田真理．梨花女子大学 2024-2026 Ewha Global Fellow (EGF)．梨花女子大学，2024．

1-2. 研究活動費

文部科学省科学研究費補助金基盤研究(C). 子育て期の家族のメンタルヘルスに着目した支援とソーシャルキャピタルのあり方の検討. 2020年度—2023年度, 3,640千円.

愛知医科大学 山本弘江 (研究代表者), 池田真理 (研究分担者) .

文部科学省科学研究費補助金基盤研究(C). Covid-19 で実習経験が不足した看護師への現場型新人看護師教育プログラムの開発. 2021年度—2023年度, 4,160千円.

東京女子医科大学 河合麻衣子 (研究代表者), 池田真理 (研究分担者) .

文部科学省科学研究費補助金基盤研究(C). 看護基礎教育課程における政策教育プログラムの導入ガイドの開発. 2022年度—2025年度, 4,030千円.

名古屋大学 野村陽子 (研究代表者), 池田真理 (研究分担者) .

文部科学省科学研究費補助金基盤研究(B). 危機に直面した家族のレジリエンスを高める Family-focused care の開発とその実装. 2023年度—2028年度, 17,680千円.

東京大学 池田真理 (研究代表者) .

文部科学省科学研究費補助金基盤研究(B). ジェンダーに基づく暴力のリカバリープロセスの全容解明と包括的な支援方法の開発. 2023年度—2026年度, 12,090千円.

東京大学 キタ幸子 (研究代表者) .

文部科学省科学研究費補助金若手研究. 家族の多重暴力に関する実態解明と多重暴力の予防・終結に向けた家族支援モデルの開発. 2020年度—2024年度, 4,160千円.

東京大学 キタ幸子 (研究代表者) .

日本看護科学学会若手研究者海外留学助成. ジェンダーに基づく暴力当事者のホリスティックなリカバリーを促す効果的で国際汎用性が高い支援方法の開発: 日米共同研究. 2024年2月—, 2024年度, 1,985千円.

キタ幸子 (研究代表者) .

文部科学省科学研究費補助金若手研究. 小児慢性疾患患者における成人移行期支援の長期的効果と移行プロセスの関連要因の解明. 2022年度—2024年度, 4,550千円.

東京大学 森崎真由美 (研究代表者) .

日本学術振興会科学研究費助成事業研究活動スタート支援. がんの子どもと家族との医療従事者向けコミュニケーション教育プログラムの開発と評価. 2023年度—2024年度, 2,200千円.

東京大学 山路野百合 (研究代表者) .

第5回 SGH がん看護研究助成. がんの子どもとその家族に対する、がん診断に関連したコミュニケーションの実態と医療従事者のニーズ調査. 2023年12月—2024年12月, 500千円.

山路野百合 (研究代表者) .

公益信託山路ふみ子専門看護教育研究助成基金. 周産期の両親を対象とした、セルフ・コンパッションを題材とする心理教育プログラムの開発. 2022年度—2023年度, 1,200千円.

村本美由希 (研究代表者) .

1-3. 学内外の公的活動

池田真理

健康総合科学科看護科学専修長	2022 年 4 月～
国立大学保健医療学系代表者協議会の看護学分科会	
大学院教育検討委員会委員	2022 年 4 月～
日本看護協会 認定看護管理者制度委員会 委員	2020 年 4 月～
日本看護系大学協議会 (JANPU) 国際交流推進委員会 委員	2017 年 7 月～
日本看護系学会協議会 (JANA) 理事	2023 年 6 月～
日本看護科学学会 理事	2019 年 6 月～
国際活動推進委員会 委員長	2019 年 6 月～
若手研究者助成選考委員会 委員	2021 年 6 月～
委員長	2023 年 6 月～
COVID-19 看護研究等対策委員会 委員	2019 年 6 月～
和文誌専任査読委員	2021 年 10 月～
日本家族看護学会 理事	2019 年 6 月～
副理事長	2022 年 6 月～
利益相反管理委員会 委員長	2022 年 6 月～
Covid-19 調査研究プロジェクト 委員長	2022 年 6 月～
第 30 回日本家族看護学会学術集会 運営委員	2022 年 6 月～
日本看護管理学会 評議員	2017～2023 年
国際化粧療法協会 理事	2021 年 1 月～
第 3 回国際化粧療法医学会 副大会長	2022 年 4 月～
アタッチメント・スタイル・インタビュー研究会 (ASI-J 研究会)	
トレーナー・講師 (年に 6 回実施)	2013 年 4 月～
East Asian Forum of Nursing Scholars Chair (代表理事)	2021 年 4 月～
13 th Hong Kong International Nursing Forum Co-organizer (共催代表)	2023 年 9 月～
International Family Nursing Association Nominating Committee	2018 年 6 月～
東京女子医科大学 非常勤講師	2021 年 4 月～
東京女子医科大学病院 セミナー講師	2022 年 1 月
太陽生命少子高齢社会研究所 講演講師	2023 年 1 月～

キタ幸子

健康科学・看護学専攻家族看護学分野 倫理指導員	2022年4月～2024年3月
日本看護科学学会 和文編集委員会 委員	2019年6月～2023年7月
日本家族看護学会 利益相反管理委員会 委員	2022年6月～
専任査読委員	2022年6月～
Covid-19 調査研究プロジェクト 委員	2022年6月～
Multicultural Study of Trauma Recovery Consortium (MiStory) 理事	2019年9月～
東京都医学事業「予防的支援推進とうきょうモデル事業」	
アドバイザーボード 委員	2022年4月～
International Journal of Environmental Research and Public Health, Special issue: Improving Nursing Quality of Maternal and Child Health Guest editor	2022年9月～2023年5月
International Journal of Environmental Research and Public Health, Special issue: Research on Children and Adolescent: Trauma, Violence, and Abuse Guest editor	2022年9月～2023年5月
日本フォレンジック看護学会 評議員	2023年4月～
国際交流委員会 委員	2023年4月～
石川県立看護大学 非常勤講師	2023年4月～
日本赤十字秋田看護大学 非常勤講師	2023年4月～
九州大学 非常勤講師	2023年4月～
Temple University Japan Campus Adjunct Professor	2023年9月～

森崎真由美

日本家族看護学会 国際交流委員会 委員	2021年8月～
Covid-19 調査研究プロジェクト 委員	2022年6月～
専任査読委員	2022年9月～
東京大学健康総合科学科 広報委員会 委員	2021年12月～
神戸大学 非常勤講師	2023年4月～

山路野百合

日本コクランセンター 理事	2023年6月～
日本緩和医療学会 小児がん性疼痛ガイドライン WPG 員	2023年11月～

1-4. 国際活動

海外からの研究者招聘

Denise M. Saint Arnault, Ph.D. RN. FAAN.

Professor, Vice Chair for Administration of the Professional Graduate Programs
Department of Health Behavior and Biological Sciences
University of Michigan School of Nursing



関心分野

Women's mental health, Culture and mental health,
Immigrant women, Gender-specific mental health risks,
Transcultural psychiatry

Laura Sinko, Ph.D. MSHP. RN.

Assistant Professor
Department of Nursing
Temple University College of Public Health



関心分野

Gender-based violence, Trauma healing,
Visual qual methods, Healing-centered approaches

招聘期間

2023 年 5 月 22－26 日

GNRC セミナー

The theory and practices of mixed method study

日時：2023 年 5 月 23 日 13:00－15:00

場所：医学部 3 号館 S102

UTOKYO NURSING GNRC
Special Lecture Series, Global Nursing Research Center
The University of Tokyo

The theory and practices of mixed method study

In this seminar, we will learn the theory and practices of mixed method study through the examples of mixed method study using visualized tools.

Dr. Denise M. Saint Arnault
Vice-chair of the Department of Health Behavior and Biological Sciences,
School of Nursing, University of Michigan

Dr. Laura Sinko
Assistant professor of the Temple University College of Public Health

May 23rd, 2023 13:00 - 15:00
Faculty of Medicine, bldg.3 room S102
※ Up to 50 onsite participants **Free**

Registration: <https://forms.gle/jo3turxCcp1gBDPK8>

For inquiries: Professor. Mari Ikeda
Senior Lecturer. Sachiko Kita
kitasachiko1104@g.ecc.u-tokyo.ac.jp



Chiyoung Cha, Ph.D. RN.
Professor
School of Nursing
Ewha Womans University

関心分野

Women's health

Tailored program for nurse burnout

招聘期間

2023 年 7 月 31 日－8 月 1 日

活動内容

池田教授との日韓共同研究についての打ち合わせ



Edward Chan Ko Ling, Ph.D. RN. FAAN.
Professor and Associate Head
Department of Applied Social Sciences
The Hong Kong Polytechnic University

関心分野

Child Maltreatment, Intimate Partner Violence
Chinese Migration and Child Welfare
Child and Family Poly-victimization
Family Violence, Polyvictimization

招聘期間

2023年9月8-16日



GNRC セミナー

From Antenatal Family Polyvictimization, Maternal Stress, to Infant Biomarkers: An Integrated Approach to the Pregnancy Care

日時：2023年9月14日 10:00 - 12:00

場所：医学部3号館 N101

UTOKYO NURSING GNRC

Special Lecture Series, Global Nursing Research Center
The University of Tokyo

**From Antenatal Family Polyvictimization,
Maternal Stress, to Infant Biomarkers:
An Integrated Approach to the Pregnancy Care**

 **Prof. Edward, Chan Ko Ling**
Department of Applied Social Sciences,
The Polytechnic University of Hong Kong



 **September 14th, 2023**
10:00 - 12:00

 **Faculty of Medicine, bldg.3 room N101**
Hybrid seminar (Zoom meeting)
MAP

Free

Registration: <https://forms.gle/TGKSvdw39VG3TZP19>
Application deadline: September 11th

For inquiries: Professor. Mari Ikeda
Senior Lecturer, Sachiko Kita
kitasachiko1104@g.ecc.u-tokyo.ac.jp



Denise M. Saint Arnault, Ph.D. RN. FAAN.

Professor, Vice Chair for Administration of the Professional Graduate Programs
Department of Health Behavior and Biological Sciences
University of Michigan School of Nursing



関心分野

Women's mental health/ Culture and mental health/ Immigrant women/
Gender-specific mental health risks/ Transcultural psychiatry

招聘期間

2023 年 12 月 11－15 日

活動内容

キタ幸子講師とのフィールド調査及び研究打ち合わせ

Chia-Chin Lin, Ph.D. RN. FAAN.

Alice Ho Miu Ling Nethersole Charity Foundation Professor in Nursing, and Director at HKU School of Nursing

関心分野

Cancer Pain Management, Symptom Management,
End of Life Care, Physical Activity in Cancer and Palliative Care

招聘期間

2023 年 12 月 19－20 日

GNRC セミナー

Leadership Role in Nursing Career

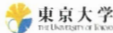


日時：2023 年 12 月 20 日 12:00－13:00

場所：医学部 5 号館 204

活動内容

池田教授（EAFONS Chair）との EAFONS の多国間共同研究の打ち合わせ





GNRC Seminar

FREE

Leadership Role in Nursing Career

20th December 2022 (Wednesday)
12:00 – 13:00 (Japan Standard Time)

Chia-Chin LIN
 BSN (TMU), MSN (UW), EMBA (NTU), PhD (UW), FAAN, RN

Alice Ho Miu Ling Nethersole Charity Foundation Professor in Nursing
 Director of School of Nursing, The University of Hong Kong

Place: University of Tokyo, Hongo Campus, Medical Building 5, 2F, Room 204
 Online attendance is also available on ZOOM.
 (For online attendance, register here lly.tytlk.jp or scan the QR code)

For inquiries: Project Lecturer Sameh Eltaybani (e-mail: eltaybani-sameh@ecc.u-tokyo.ac.jp)




医学部健康総合科学科
 学部教育の総合的改革の推進プロジェクト

特別講義 & 談話会
Dr. Chia-Chin Lin
 BSN(TMU), MSN(UW), EMBA(NTU),
 PHD(UW), FAAN, RN



所属 : Alice Ho Miu Ling Nethersole
 Charity Foundation Professor in
 Nursing, Director at Hong Kong
 University, School of Nursing

研究分野 : Research: Cancer Pain
 Management, Symptom
 Management, End of Life Care,
 Physical Activity in Cancer and
 Palliative Care

◆談話会 (対象: 健康総合科学科の学部学生)
 12月19日 (火) 16:50 - 17:50 医学部3号館S102

◆特別講義
 Empowering autonomy: Advance Care Planning
 and Compassionate Comfort in End-of-life Care
 for Older Adults
 12月20日 (水) 16:50 - 18:35 医学部3号館N101
 事前申込はこちらから→



<問い合わせ先>
 健康総合科学科 学部教育の総合的改革の推進プロジェクト 特任助教 泉
 Email: [sizumi\[at\]g.ecc.u-tokyo.ac.jp](mailto:sizumi[at]g.ecc.u-tokyo.ac.jp)

海外訪問

施設訪問

池田真理教授が、コロンビア大学を訪問し、Dr. Suzane Bakken, Dr. Maxim Topaz, Dr. Sarah Collins Rossetti らと意見交換を行った。

日時：2023 年 10 月 2 日

場所：コロンビア大学, ニューヨーク州, アメリカ合衆国



施設訪問

池田真理教授が、イエール大学を訪問し、学部長の Dr. Azita Emami 博士他、Dr. Joan Combellick, Dr. Xiaomei Cong, Dr. Deena Costa, Dr. Zhao Ni, Dr. Deena Costa, Dr. Raquel Ramos と意見交換を行った。

日時：2023 年 10 月 3 日

場所：イエール大学, ニューヘブーン, コネチカット州, アメリカ合衆国



施設訪問

池田真理教授と山路野百合特任助教が、ワシントンの Children's National Hospital を訪問し、病院見学及び、Pamela S. Hinds 教授らとプレゼンテーション、国際共同研究に関するディスカッションを行った。

日時：2023 年 10 月 4 日

場所：Children's National Hospital, ワシントン D.C., アメリカ合衆国



日韓共同研究打ち合わせ

池田真理教授が、梨花女子大学を訪問し、日本と韓国の看護職者の癒しの経験の探索について、データの分析および今後の研究計画の打ち合わせ、ディスカッションを行った。

日時：2024 年 1 月 24 – 26 日

場所：Ewha Womans University, 韓国



国際共同研究打ち合わせ

池田真理教授が、EAFONS 理事会で今後の国際共同研究について意見交換をした。

日時：2024 年 3 月 6 日

場所：The University of Hong Kong, 香港



国際共同研究打ち合わせ

キタ幸子講師が、ジェンダーに基づく暴力（GBV）の国際共同研究チーム Multicultural Study of Trauma Recovery (MiStory) Consortium の研究打ち合わせ・ディスカッションを行った。

日時：2023 年 10 月 15－20 日

場所：Hellenic Mediterranean University, ギリシャ



2. 学位論文（卒業論文・修士論文・博士論文）

卒業論文

大久保紗佳「小学校から高校までの教員との関係性が及ぼす幼少期の養育者との関係性と若年成人における援助希求の困難さの関連への影響：横断観察研究」

卒業論文

片岡朋恵「医療機関におけるトランスジェンダーが直面しやすい課題と必要な支援・体制に関する専門家へのインタビュー調査」

博士論文

村本美由希「周産期の両親を対象としたセルフ・コンパッションを題材とする出産育児準備プログラムの開発」

3. 教室カンファレンス

4月18日

池田 真理 (レクチャー)

研究とは

村本 美由希 (レクチャー)

論文の読み方

4月25日

山路 野百合 (レクチャー)

文献レビューの方法

キタ 幸子 (レクチャー)

研究倫理

5月9日

森崎 真由美 (レクチャー)

インタビューガイドづくりのポイント

村本 美由希 (研究発表)

Development of self-compassion-based program for couples during the perinatal period — A longitudinal realist evaluation

5月16日

村本 美由希 (レクチャー)

質問紙づくりのポイント

下山 結衣 (論文抄読)

Another step to school inclusion: Development and validation of the Children's Attitudes Toward Autism Questionnaire. Autism, 2021, 25(6): 1666-1681.

5月23日

キタ 幸子 (レクチャー)

潜在クラス分析の基礎と実際

山路 野百合 (研究発表)

Supporting the decision-making of children with cancer: A meta-synthesis

5月30日

片岡 朋恵 (研究発表)

医療機関におけるトランスジェンダーが直面する問題と必要な配慮に関する質的研究 — 専門家へのインタビュー調査 —

大久保 紗佳 (研究発表)

親子関係と高校教員との関係と、現在の援助要請態度の関連

杉本 達也 (研究発表)

保育園・幼稚園における食育のテーマ・手法・効果について—スコーピングレビュー—

6月6日

伊藤 美千代 (研究発表)

再燃を繰り返すクローン病をもつ人の働く意欲に着眼した就労生活の再構築プロセスに関する質的研究

6月13日

村本 美由希 (研究発表)

Development of self-compassion-based program for couples during the perinatal period — A longitudinal realist evaluation

下山 結衣 (予演)

未就学児向け多様性への寛容さ尺度開発に向けた予備的研究

6月29日

片岡 朋恵 (研究発表)

医療機関におけるトランスジェンダーが直面する問題と必要な配慮に関する質的研究
—専門家へのインタビュー調査—

大久保 紗佳 (研究発表)

親子関係と高校教員との関係と、現在の援助要請態度の関連

杉本 達也 (研究発表)

保育園・幼稚園における食育のテーマ・手法・効果について—スコーピングレビュー—

7月4日

堀 静穂 (論文抄読)

Factors affecting quality of life of caregivers of children diagnosed with autism spectrum disorder. Indian Journal of Psychiatry, 2018, 60(3): 278-285.

村本 美由希 (研究発表)

Development of self-compassion-based program for couples during the perinatal period — A longitudinal realist evaluation

7月11日

下山 結衣 (研究発表)

修士研究相談

徳村 亜依 (抄読)

Effects of a pretend play intervention on health-related quality of life in children with cancer: A Swedish-German study. Journal of pediatric hematology/oncology nursing, 2023, 40(3): 158-169.

7月18日

佐藤 伊織 (研究発表)

脳腫瘍患者・家族のニーズとサポートに関する全国調査

堀 静穂 (研究発表)

修士研究相談

7月24日

池田 真理 (研究発表)

これまでの研究の概要 今後の教室の目指すもの

徳村 亜依 (研究発表)

修士研究相談

9月5日

2023年度後半の目標

9月12日

下山 結衣 (研究発表)

スコーピングレビュー、修士研究相談

堀 静穂（研究発表）
スコーピングレビュー、修士研究相談

9月19日

徳村 亜依（研究発表）
修士研究相談

9月26日

下山 結衣（研究発表）
修士研究相談
徳村 亜依（抄読）

Children's experiences of stress and coping during hospitalization: A mixed-methods examination. *Journal of Child Health Care*, 2023, 4: 531-546.

10月3日

堀 静穂（研究発表）
修士研究相談
下山 結衣（抄読）

PedsQL™ 4.0: Reliability and validity of the pediatric quality of life inventory™ version 4.0 generic core scales in healthy and patient populations. *Medical Care*, 2001, 39(8): 800-812.

10月10日

徳村 亜依（研究発表）
修士研究相談
堀 静穂（抄読）

Happiness, self-esteem, and prosociality in children with and without autism spectrum disorder: Evidence from a UK population cohort study. *Autism Research*, 2018, 11(7): 1011-1023.

10月17日

下山 結衣（研究発表）
修士研究相談
村本 美由希（研究発表）

Development of self-compassion-based program for couples during the perinatal period – A longitudinal realist evaluation.

11月7日

片岡 朋恵（研究発表）
医療機関におけるトランスジェンダーが直面する問題と必要な配慮に関する質的研究
—専門家へのインタビュー調査—

大久保 紗佳（研究発表）
親子関係と高校教員との関係と、現在の援助要請態度の関連

杉本 達也（研究発表）
保育園・幼稚園における食育のテーマ・手法・効果について—スコーピングレビュー—

11月14日

片岡 朋恵（研究発表）
医療機関におけるトランスジェンダーが直面する問題と必要な配慮に関する質的研究
—専門家へのインタビュー調査—
大久保 紗佳（研究発表）

親子関係と高校教員との関係と、現在の援助要請態度の関連
杉本 達也（研究発表）
保育園・幼稚園における食育のテーマ・手法・効果について—スコーピングレビュー—
伊藤 美千代（研究発表）
再燃を繰り返すクローン病をもつ人の働く意欲に着眼した就労生活の再構築プロセス
に関する質的研究

11月21日

堀 静穂（研究発表）
修士研究相談
佐藤 伊織（研究発表）
AMED 研究紹介

11月28日

大久保 紗佳（研究発表）
親子関係と高校教員との関係と、現在の援助要請態度の関連
杉本 達也（研究発表）
保育園・幼稚園における食育のテーマ・手法・効果について—スコーピングレビュー—

12月5日

徳村 亜依（研究発表）
修士研究相談
片岡 朋恵（研究発表）
医療機関におけるトランスジェンダーが直面する問題と必要な配慮に関する質的研究
—専門家へのインタビュー調査—

12月12日

大久保 紗佳（研究発表）
親子関係と高校教員との関係と、現在の援助要請態度の関連
杉本 達也（研究発表）
保育園・幼稚園における食育のテーマ・手法・効果について—スコーピングレビュー—

12月19日

片岡 朋恵（研究発表）
医療機関におけるトランスジェンダーが直面する問題と必要な配慮に関する質的研究
—専門家へのインタビュー調査—
大久保 紗佳（研究発表）
親子関係と高校教員との関係と、現在の援助要請態度の関連

1月9日

下山 結衣（研究発表）
修士研究相談
堀 静穂（研究発表）
修士研究相談

1月16日

片岡 朋恵（卒論予演）
医療機関におけるトランスジェンダーが直面する問題と必要な配慮に関する質的研究
—専門家へのインタビュー調査—

大久保 紗佳（卒論予演）

親子関係と高校教員との関係と、現在の援助要請態度の関連

1月23日

片岡 朋恵（卒論予演）

医療機関におけるトランスジェンダーが直面する問題と必要な配慮に関する質的研究
—専門家へのインタビュー調査—

大久保 紗佳（卒論予演）

親子関係と高校教員との関係と、現在の援助要請態度の関連

2月6日

徳村 亜依（研究発表）

修士研究相談

堀 静穂（抄読）

Social engagement and loneliness in school-age autistic girls and boys. *Women's Health*, 2023, 19: 1-12.

2月13日

下山 結衣（研究発表）

修士研究相談

2月20日

伊藤 美千代（研究発表）

再燃を繰り返すクローン病をもつ人の働く意欲に着眼した就労生活の再構築プロセス
に関する質的研究

徳村 亜依（抄読）

Caring for children in pediatric intensive care units: An observation study focusing on nurses' concerns. *Nursing Ethics*, 2013, 20(5): 528-538.

杉本 達也（研究発表）

保育園・幼稚園における食育のテーマ・手法・効果について—スコーピングレビュー—

2月27日

堀 静穂（研究発表）

修士研究相談

下山 結衣（抄読）

Development and initial validation of a scale measuring young children's self-perceptions of trait cognitive control. *Journal of Cognition and Development*, 2021, 22(2): 203-225.

3月19日

2023年度年間進捗報告

4. 家族看護学教室研究会

(講師敬称略)

第1回 2023年5月23日 (共催 グローバルナーシングリサーチセンター)

Denise M. Saint Arnault

(Vice-chair of the Department of Health Behavior and Biological Sciences, School of Nursing, University of Michigan)

Laura Sinko

(Assistant professor of the Temple University College of Public Health)

「The theory and practices of mixed method study」

第2回 2023年6月3日

池田 真理

(東京大学大学院 医学系研究科 健康科学・看護学専攻 家族看護学分野 教授)

キタ 幸子

(東京大学大学院 医学系研究科 健康科学・看護学専攻 家族看護学分野 講師)

「当事者の思いや体験を視覚化する方法論～CENIとPEARLの理論と応用～」

第3回 2023年7月29日

加茂 登志子

(若松町こころとひふのクリニック メンタルケア科、一般社団法人日本PCIT研修センター 代表理事)

「Parent-Child Interaction Theory (PCIT)による親子関係への介入とトラウマケア」

第4回 2023年10月14日

久保山 茂樹

(独立行政法人 国立特別支援教育総合研究所 インクルーシブ教育システム推進センター 上席総括研究員・センター長)

「日本におけるインクルーシブ教育の現状と課題」

第5回 2023年12月2日

萩原 綾子

(神奈川こども医療センター 看護局 副看護局長 / 退院・在宅医療支援室長)

「子どもと家族の幸せと倫理的課題に向き合う～アリスちゃんの物語を通して～」

第6回 2024年3月20日 (共催 東京大学家族看護学教室同窓会)

津村 明美

(認定NPO法人 横浜こどもホスピスプロジェクト)

「コミュニティ型こどもホスピスにおける家族看護の実践」

5. 教育活動（担当講義・実習）

令和5年度家族看護学教室担当講義・実習一覧

【学部】

講義名	履修	単位	学年	開講時期および時間		
看護学概論Ⅰ：生きることを支える科学	総合科目一般 D 人間・環境一般 教養課程選択	2	1・2	前期	木	16：50～18：35
看護学概論 2：社会で活躍する看護プロフェッショナル	総合科目一般 D 人間・環境一般 教養課程選択	2	1・2	後期	木	16：50～18：35
健康総合科学概論	必修	1	2	後期 A1・A2	月	10：25～12：10
ヘルスコミュニケーション学	看護科学専修必修 選択	1	3	前期 S1	水	8：30～10：15
家族と健康	看護科学専修必修 選択	2	3	後期 A1	月	8：30～12：10
小児看護学Ⅰ	看護科学専修必修 選択	2	3	後期 A2	月	13：00～16：40
小児看護学実習Ⅰ	看護科学専修必修	1	3	後期 W	火～月	9：00～16：00
小児看護学Ⅱ	看護科学専修必修	2	4	前期 S2	木	13：00～16：40
小児看護学実習Ⅱ	看護科学専修必修	1	4	後期 A1	月～金	8：00～15：00
統合実践実習	看護科学専修必修	1	4	後期 A1	月～金	8：00～15：00

※ 開講時期

S1	4月5日	～	6月1日	8週
S2	6月3日	～	7月31日	8週
A1	10月1日	～	11月27日	8週
A2	11月28日	～	1月31日	8週
W	2月3日	～	3月7日	5週

【大学院】

家族看護学実習	4月～8月
家族看護学特論Ⅰ	6月～7月
家族看護学特論Ⅱ	10月～12月

資料（卒論・修論・博論）

卒業論文の内容の要旨
論文題目：小学校から高校までの教員との関係性が及ぼす
幼少期の養育者との関係性と若年成人における
援助希求の困難さの関連への影響：横断観察研究

指導教員：キタ幸子講師、池田真理教授

東京大学医学部健康総合科学科

2022 年度進学

氏名 大久保 紗佳

【背景】援助希求は身体的・精神的健康の維持や向上に重要であると言われている。また、援助希求にはアタッチメント・スタイルが影響し、アタッチメント・スタイルは幼少期の養育者との関係性に大きく規定される。一方、アタッチメント・スタイルは養育者以外の他者との出会いによって再組織化されるとも言われており、幼少期に養育者と安定的な関係性を築くことが難しかった場合でも、養育者以外の他者との関係性によって、安定したアタッチメント・スタイルに変化する可能性がある。学童期の子どもにとって、学校は家庭外の大人と信頼関係を育む重要な機会であり、教員はその後の価値観や生活習慣に影響を及ぼす重要他者の一人であることから、学校における教員との関係性に注目する必要がある。

【目的】本研究では、幼少期において養育者との安定的な関係性の構築が難しかった場合でも、小学校・中学校・高校で教員と信頼関係を構築することができた場合には、若年成人における援助希求の困難さが低減するという仮説をたて、それを検証することを目的とする。

【方法】本研究では、2023 年 9 月～11 月の間、調査ウェブシステムを用いた無記名自記式質問票調査による横断観察研究を行った。対象者は 18～25 歳で日本語の読み書きができる者とした。質問票では対象者の属性のほか、幼少期（6 歳まで）の養育者との関係性、小学校・中学校・高校の教員との関係性、現在の援助希求の困難さの程度を聞いた。援助希求の困難さの程度を従属変数として 2 変量相関分析を行ったのち、交絡因子を調整した上で、幼少期の養育者との関係性と小学校・中学校・高校の教員との関係性の交互作用項を含めた重回帰分析を実施した。その後、重回帰分析で有意な関連が示唆された交互作用項について、単純傾斜分析を実施した。

【結果】研究に同意した 202 名の内、欠損値が多かった 2 件を除き、200 件のデータを解析対象とした。まず、教員との安心感を含めた重回帰分析で、身体的な不調を伝える難しさと有意な関連を示したのは性別($\beta = -.65$)と幼少期の養育者との拒否的な関係性($\beta = .08$)であり、精神的な不調を伝える難しさと有意な関連を示したのは幼少期の養育者との拒否的な関係性($\beta = .10$)と教員への安心感($\beta = -.03$)であった($p < .05$)。次に、教員への不信を含めた重回帰分析で、身体的な不調を伝える難しさと有意な関連を示したのは性別($\beta = -.69$)であり、精神的な不調を伝える難しさと有意な関連を示したのは幼少期の養育者との拒否的な関係性($\beta = .10$)であった($p < .05$)。また、幼少期の拒否的な関係性と教員への不信の交互作用項($\beta = -.01$)と、幼少期のアンビバレントな関係性と教員への不信との交互作用項($\beta = .01$)は、精神的な不調を伝える難しさとの関連を示唆していた($p < .10$)。更に、教員への役割遂行評価を含めた重回帰分析では、身体的な不調を伝える難しさと有意な関連を示したのは性別($\beta = -.61$)と幼少期の養育者との拒否的な関係性($\beta = .07$)であり、精神的な不調を伝える難しさと有意な関連を示したのは幼少期の養育者との拒否的な関係性($\beta = .10$)であった($p < .05$)。重回帰分析で関連が示唆された交互作用項について単純傾斜分析を行った結果では、教員への不信が低かった群と比べて高かった群では、幼少期の養育者との拒否的な関係性と精神的な不調を伝える難しさの関連が、わずかに弱まっていた。また、教員への不信が高かった群では、幼少期の養育者とのアンビバレントな関係性が高いほど精神的な不調を伝える難しさが高くなっていた一方、教員への不信が低かった群では、幼少期の養育者とのアンビバレントな関係性が高いほど精神的な不調を伝える難しさが低くなっていた。

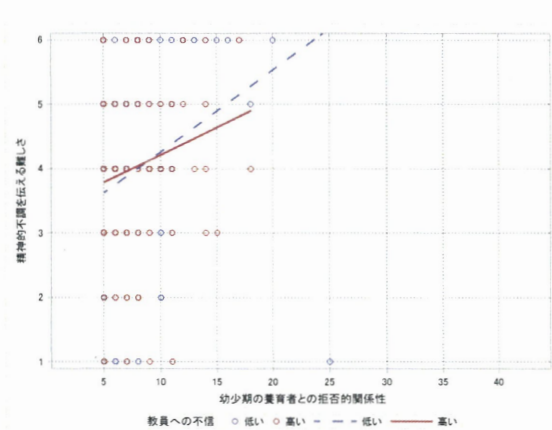


図1 教員への不信で2群に分けた時の
養育者との拒否的な関係性と精神的な不調を伝える
難しさの関連の単純傾斜分析

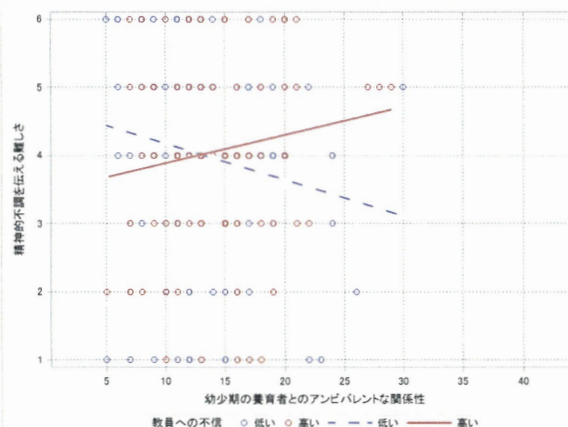


図2 教員への不信で2群に分けた時の
養育者とのアンビバレントな関係性と精神的な不調
を伝える難しさの関連の単純傾斜分析

【結論】重回帰分析で関連が示唆された交互作用項について単純傾斜分析をした結果、教員への不信が低かった群と比べて高かった群では、幼少期の養育者との拒否的な関係性と精神的な不調を伝える難しさの関連が、わずかに弱まっていた。また、教員への不信が高かった群では、幼少期の養育者とのアンビバレントな関係性が高いほど精神的な不調を伝える難しさが高くなっていた一方、教員への不信が低かった群では、幼少期の養育者とのアンビバレントな関係性が高いほど精神的な不調を伝える難しさが低くなっていた。本研究によって、若年成人の精神的健康の維持・向上及び不調に関する援助希求の促進のためには、学校における全体への一律的な教育・介入だけではなく、幼少期の養育者との関係性を丁寧にアセスメントした上で個別に関わることの必要性が示唆された。特に、養育者とのアンビバレントな関係性を経験した子どもに対しては、小学校・中学校・高校において教員と信頼関係を構築できるような機会の提供やシステム作りが重要であることが示唆された。

卒業論文の内容の要旨
論文題目：医療機関におけるトランスジェンダーが直面しやすい課題と
必要な支援・体制に関する専門家へのインタビュー調査

指導教員：キタ幸子講師、池田真理教授

東京大学医学部健康総合科学科

2022 年度進学

氏名 片岡 朋恵

緒言

トランスジェンダーとは、出生時に割り当てられた生物学的な性と性自認が異なる者であり、人口学的データは少ないものの全人口のおよそ 1 % を占めると言われている。先行研究から、トランスジェンダーは社会のスティグマにより、精神疾患や物質依存、自殺未遂といった様々な健康問題を呈しやすいことがわかっている。また、日本ではトランスジェンダーの治療を専門とする医療機関以外での臨床現場において、外来受診または入院中のトランスジェンダーへの適切で十分な配慮の必要性が示唆されるものの、具体的な医療機関でトランスジェンダーが直面しやすい課題や必要な支援・体制は明らかになっていない。

本研究の目的は、トランスジェンダーの専門家へのインタビューを通して、①日本の医療現場におけるトランスジェンダーが直面しやすい問題と医療機関が支援を行う上での課題、②医療機関における必要な支援・工夫と十分な支援を行う上でのシステムの変革に関する具体的な示唆を得ることである。

方法

半構造化面接を用いた質的記述的研究を行った。対象者はトランスジェンダーの治療や支援に関する専門的知識及び 3 年以上の治療・支援・研究経験を有する医療従事者・専門家(医師、看護師、公認心理師、研究者など)で、日本語で会話可能な者とした。事前に調査ウェブシステムを用いて、年齢、最終学歴、資格の有無・種類・取得時期、トランスジェンダーへの治療・支援・研究の経験年数などの情報を収集し、オンラインインタビューでは日本の医療現場でトランスジェンダーが直面しやすい課題と必要な支援・体制について聞いた。内容分析の言及事項分析を実施し、分析対象となるデータに関して、記録単位を決定し、記録単位の意味内容の類似性に従い、分類し、カテゴリー、テーマを生成した。

結果

本研究では、トランスジェンダーの治療やケア、研究の経験を豊富に有する医師(1 名)と看護師(1 名)の合計 2 名から、経験に基づいた事実、また、今後の展望について考えていることなど、詳細な語りが得られた。

トランスジェンダーが医療現場で直面しやすい問題として、10 のカテゴリーと 4 のテーマ：【フルネームによる本人確認への抵抗】【カミングアウトに関連する混乱や心身の負担】【トランス女性の受け入れられにくさ】【家族関係の問題】が生成され、最も発言が多かった内容は【フルネームによる本人確認への抵抗】【トランス女性の受け入れられにくさ】であった。医療機関が支援を行う上での課題として、9 のカテゴリーと 5 のテーマ：【病室の割り当ての困難さ】【一律の対応の限界】【医療者の基本的な知識の不足】【医療者の無関心さ】【病院の利益につながらないことによる設備変革の困難さ】が生成され、最も発言が多かった内容は【医療者の基本的な知識の不足】、続いて【病室の割り当ての困難さ】【医療者の無関心さ】であった。

医療機関における必要な支援や工夫について、20 のカテゴリーと 8 のテーマ：【多目的トイレの使用の促し】【性自認に配慮した入浴介助】【本人確認の方法の工夫】【必要な場合のみ、性別の確認】【安心して入院できるための部屋の割り当ての工夫】【当事者が決めた家族の意思を尊重した意思決定】【本人の意向を確認しながらのきめ細かい対応】【医療者との信頼関係の構築】が生成され、最も発言が多かった内容は【多目的トイレの使用の促し】【必要な場合のみ、性別の確認】【本人の意向を確認しながらのきめ細かい対応】であった。十分な支援を行う上でのシステムの変革について、8 のカテゴリーと 4 のテーマ：【医療者の基本的な知識・認識の習得】【病院での多職種連携】【病院全体での啓発活動】【配慮や対応に関する法整備】が生成さ

れ、最も発言が多かった内容は【医療者の基本的な知識・認識の習得】であった。

考察

本研究では、トランスジェンダーが医療現場で直面しやすい問題として、【フルネームによる本人確認への抵抗】【カミングアウトに関連する混乱や心身の負担】が挙げられ、【本人確認の方法の工夫】【必要な場合のみ、性別の確認】といった具体的な支援方法が示唆された。また、【病室の割り当ての困難さ】や〈トランスジェンダーが使用できるトイレがない〉といった医療機関の構造・設備上の課題に対しては、【安心して入院できるための部屋の割り当ての工夫】【多目的トイレの使用の促し】といった支援方法が挙げられた。一方で、【病院の利益につながらないことによる設備変革の困難さ】という課題も挙げられ、トランスジェンダーへの【配慮や対応に関する法整備】の重要性も示唆された。

医療機関でのトランスジェンダーのニーズは多様であり、【一律な対応には限界】があることから、【本人の意向を確認しながらのきめ細かい対応】が必要であり、そのためには、医師や看護師、事務職員やソーシャルワーカーなどの（すべての職種、世代、性別を交えた研修会を行い、具体的な対応について病院全体で話し合う）といった【病院での多職種連携】の必要性も明らかになった。また、多くの問題の背景には【医療者の基本的な知識の不足】【医療者の無関心さ】といった医療者自身の課題があり、【医療者の基本的な知識・認識の習得】の重要性が示唆された。先行研究より、社会のスティグマにより様々な健康問題を呈しやすいトランスジェンダーは、医療機関においても医療者の無理解や偏見などにより、医療アクセスに課題を抱えていることがわかっている。そのため、医療者が基本的な知識・認識を習得し、医療機関全体での支援を実施することに加え、〈トランスジェンダーに理解がある病院であることをアピールする〉という【病院全体での啓発活動】により、トランスジェンダーの医療アクセスを改善し、結果として、長期的な健康改善に寄与できると考える。

結論

本研究により、トランスジェンダーが直面する問題の解決に向けて、医療者の教育、多職種連携、医療機関全体での啓発や設備の充実、そのための法整備など多層的なシステム構築の重要性が示唆された。

氏名 村本 美由希

序文

周産期の両親にとって、セルフ・コンパッション（辛い時に自分自身に向ける思いやりの気持ち）は、困難を乗り越えるための心理的資源になりうるが、それを題材とする出産育児準備教育は確立されていない。プログラムの価値判断をする上で、どのような背景（コンテキスト）を持つ人に対して、どのようなメカニズムを作用させ、どのようなアウトカムが得られるのかというプログラム作用理論の生成が必要である。そこで、本研究は、初産の両親が親役割獲得という発達課題に家族として適応できるよう、複数のカップルと共に同時受講をするセルフ・コンパッションを題材とした出産育児準備プログラムを開発し、プログラム作用理論の解明を目的とする。

研究デザイン：【研究1】インタビュー調査に基づくプログラム開発と作用理論の仮説生成、【研究2】介入試験に基づくリアリスト評価（Realist Evaluation; 以下 RE）を行った。【研究1】では、文献レビューと一般成人集団を対象とした心理教育プログラム Mindful Self-Compassion TM（以下、MSCTM）参考に暫定版プログラムを作成し、その受容性と妥当性を検討するために専門家及び出産経験者を対象としたインタビュー調査を実施した。テーマ分析を用いて受容性と妥当性を検討した上で修正版プログラムを作成した。【研究2】では、初産の両親（コホート1）を対象に、妊娠期から産後3か月に修正版プログラムを実施した。REを用いて定性的データと定量的データからプログラム作用理論を生成した上で、改善版プログラムを作成した。同様にコホート2を対象に、改善版プログラムを実施し、受容性と妥当性の向上を検討した上で、プログラム作用理論を充足した。

研究1：インタビュー調査

目的：専門家及び出産経験者を対象とした半構造化面接に基づき、暫定版プログラムの妥当性と受容性を検討すること。

方法：2022年4月から7月に、周産期支援の専門家、MSCTM公認指導者、過去2年以内に出産し育児中の母親と父親（出産経験者）を対象に、半構造化面接を実施した。まず文献レビューとMSCTMを参考に暫定版プログラムを作成し、成人学習理論を基にプログラム作用理論の仮説を立てた。その上で、対象者にインタビューガイドに沿って暫定版プログラムの学習形態の受容性やカリキュラム内容の妥当性を尋ねた。本研究は、東京大学医学部附属倫理委員会の承認（承認番号：2021333NI, 2021333NI-(1)）を得て実施した。

結果：対象者は、周産期支援専門家2名、MSCTM公認指導者2名、育児中の母親1名（子ども1名）、父親2名（子ども1-2名）の合計7名であった。所要時間は平均71分（58-84分）であった。テーマ分析の結果、【動画視聴】【オンラインカフェ】【学習形態】【瞑想の練習】【質疑応答】【その他】の6つのカテゴリーに関して、25のテーマが抽出され、主に周産期の両親が抱く多様な心境、語りやすさ、安全性への配慮の必要性が明らかになった。

考察：産後に起こりうる多様な心境を提示することは、セルフ・コンパッションを活用する準備性が高まる可能性がある。また、父親も話しやすいディスカッション、動画内容の変更、や動画視聴期間中の介入者とのインタラクションの増加は、より安全で受け入れやすくなる可能性がある。

小括：心理的要素を含む出産育児準備教室としての受容性と妥当性を高めた修正版プログラムを作成した。

研究2：一群前後比較介入試験

目的：【コホート1】プログラム作用理論を生成し、プログラムの改善案を作成すること。

【コホート2】受容性と妥当性の向上を検討し、プログラム作用理論を充足すること。

方法：2022年12月-2023年4月（コホート1）、2023年6月-11月（コホート2）に、介入試

験をした。対象者の包含基準は、(1) オンラインカフェ (Online Café; 以下 OC) 参加開始時点で妊娠 22 週以降妊娠 31 週未満の初産妊婦とそのパートナーのカップル、(2) 18 歳以上、(3) 日本語に不自由のない者、除外基準は、(1) 精神科/心療内科に通院中の者、(2) OC 欠席予定のある者、(3) 研究者が、参加が過度な負担になると判断した者 (例: 過去半年以内の大きな悲嘆体験) とした。研究協力機関 1 施設の妊婦健診時での研究紹介と、スノーボーリング法を用いてリクルートした。本研究は、東京大学医学部附属倫理委員会の承認 (承認番号: 2022219NI, 2022219NI - (1)) を得て、臨床研究データベースに登録 (登録番号: jRCT1030220453) をした上で実施した。倫理的観点から、抑うつや児へのボンディング障害の可能性が判明した場合、メールで相談希望を尋ね、研究協力機関受診中の妊婦とそのパートナーに関しては、研究協力機関に情報提供を行った。介入は、妊娠期 5 週間に、複数のカップルと参加する OC2 回、5 つの動画の個人視聴、体験レポート提出 2 回を行い、産後 1~3 か月頃に、OC1 回を行った。データ収集方法は、OC 中の発言、フィールドノート、質問紙調査 (妊娠期介入前、妊娠期介入後、産後介入後、出産報告フォーム)、体験レポート 2 回と感想提出である。調査項目は、属性 (社会的、産科的、医学的、育児に関する項目)、形成評価項目 (総合的実施評価 iOSDMH、各カリキュラムの参加度と満足度)、心理測定尺度 (セルフ・コンパッション SCS、慈悲への恐れ FoC、成人アタッチメント ECRGO、抑うつ EPDS、認知的ストレス PSS、児へのボンディング MIBS、夫婦関係満足度 QMI、認知的被養育体験 PARS、認知的妊娠体験 PES)、プログラム期間中の認知的体験 (自由質問) である。分析方法は、収斂的混合分析アプローチを採用し、RE を行った。個別 RE: 各参加者の定性的・定量的データをコード化し、コンテキスト (C)、メカニズム (M)、アウトカム (M) に沿ってコーディングを行った。統合 RE: コホート全員のコードの類似性と相違性に着眼して分類をし、カテゴリーに命名した上で、プログラム作用理論を生成した。

コホート 1 結果: 8 名のうち、体調不良で全 OC を欠席した 1 組を除き、6 名が OC3 まで参加した (脱落率 25%)。RE の結果、本プログラムにより、多様な自己観を持ちながらも、妊娠、育児生活、対人関係に関連した不安を背景に、妊娠期介入中は【多様な想いを傾聴しあう体験を通じて、グループで学ぶ居心地の良さを確認する】【自己洞察を促す継続的カリキュラムを通じて、自分との向き合い方について自己対話をはじめる】【各々の感じ方を尊重する動画を通じて、セルフ・コンパッションを学ぶ意味を探索する】【パートナーやメンバーの心境を聴く機会を通じて、自分に集中していた視野を広げる】という 4 つのメカニズムを経て、【深い自己洞察】【自分の心に歩み寄れた手応えの感覚】【協同育児をする心構え】を獲得する。産後介入時は、困難な生活や支援者の存在を背景に、【一緒に学んできた仲間と産前産後の困難を振り返る時間を通じて、自分の軌跡を立ち止まって振り返る】【実践の共有やグループ内の共助を実感する時間を通じて、学びを新たな生活に反映する】【懐かしい瞑想練習や実践と学びを振り返る時間を通じて、自分の学習経験の意味づけをする】という 3 つのメカニズムを経て、【心理的資源の活性化】【心の落ち着き】【協同育児をする意欲の高まり】を獲得する。

コホート 1 考察: 受容性と妥当性は、概ね良好であった。プログラム作用理論は、学習理論の仮説をなぞらえただけでなく、新たにアタッチメント理論に基づくメカニズムが抽出された。グループダイナミックスの影響を探索するために、反復的に RE を行う必要がある。

コホート 2 結果: 14 名のうち、OC2 以降の同意撤回をした 1 組を除き、12 名が OC3 まで参加した (脱落率 14.3%)。RE の結果、コホート 1 で生成されたプログラム作用理論が反復的に抽出された。新たに、妊娠期 C【対人関係構築に関するためらいがない】【育児生活の具体的な想像に至らない状況】、妊娠期 M【安全対策を思い出して、心地よい範囲で自分と向き合えるように練習にプレーキをかける】、妊娠期 O【心身の不調に耐えている状態】【自分自身の育児に対する心構え】、産後 C【大きな意味を持つ回復期】、産後 M【パートナーやメンバーの心境を聴く機会を通じて、育児に一点集中していた視点を変えてみる】、産後 O【自分の心への歩み寄りが道半ばである感覚】【困難な生活に対処しきれず心にくすぶる葛藤】が充足され、産後 C【新たな登場人物の存在】は、【心温まる出逢い】に改名された。

コホート 2 考察: コホート 1 と比較し、受容性に大きな変動は見られなかった。コホート 2 に精神的な不調を抱えやすい参加者が多かったことが、プログラム作用理論の充足に影響した可能性がある。

全体考察

本プログラムは、多様なコンテキストを持つ両親にも、成人学習理論に沿ったメカニズムが作用し、産前産後の生活におけるセルフ・コンパッションの活用や、お互いの心境に配慮して声をかけながら協働育児をする意欲の向上に貢献できるような出産育児準備プログラムである可能性が示唆された。セルフ・コンパッションを主とする心理的資源の活性化を得るには、自分または家族が、周りの支援者と温かく繋がっているという安心感を得るメカニズムが重要であった。一方、心理的資源の活性化を十分に得られないケースは、個人のコンテキストが阻害していた可能性があった。長期的作用の可能性が示唆されたため、今後は、長期的調査や効果検証が必要である。

結論

本研究は、周産期の両親に対する受容性と妥当性を検討した上で、セルフ・コンパッションを題材とした出産育児準備プログラムを開発した。本プログラム作用理論から、本プログラムを受講することで、初めて親になる者が、産前産後に困難な体験をした時に自分自身に思いやりを向けて心を落ち着かせ、さらにパートナーと共に育児をしていく意欲を高められることが示唆された。

家族看護学教室 教室員（令和 5 年度）

教授	池田 真理
非常勤講師	小林 京子
	涌水 理恵
	石田 也寸志
	藤井 淳子
	渡辺 俊之
	前田 浩利
講師	キタ 幸子
助教	森崎 真由美
グローバルナースングリサーチセンター 特任助教	山路 野百合
教室事務	豊田 百合
	中山 望

教育でお世話になった先生方（五十音順，敬称略）

東京大学医学部附属病院小児科	教授 加藤 元博
東京大学医学部附属病院小児外科	教授 藤代 準
東京大学医学部附属病院看護部	看護部長 武村 雪絵
	副看護部長 松田 美智代
	B 棟 2 階病棟 師長 水野 真理子
	B 棟 3 階病棟 師長 岩崎 美和

石田 也寸志	(家族看護学特論I)
岩崎 美和	(小児看護学実習I／II・統合実践実習)
大漣 優子	(小児看護学II)
大橋 力也	(小児看護学実習I)
奥原 剛	(ヘルスコミュニケーション学)
梶保 祐子	(小児看護学I)
河上 華	(小児看護学II)
神田 祥一郎	(小児看護学II)
小林 京子	(家族看護学特論II)
櫻井 善光	(小児看護学II)
清水 啓道	(小児看護学II)
角川 由香	(家族と健康)
高澤 慎也	(小児看護学II)
寺嶋 宙	(小児看護学II)
日高 もえ	(小児看護学II)
藤井 淳子	(ヘルスコミュニケーション学／家族と健康)
前田 浩利	(小児看護学I)
水野 真理子	(小児看護学実習II・統合実践実習)
山本 則子	(家族と健康)
涌水 理恵	(小児看護学I)
渡辺 俊之	(家族看護学特論I)

大学院生	博士課程
	村本 美由希
	修士課程
	下山 結衣
	徳村 亜依
	堀 静穂
卒論生	大久保 紗佳
	片岡 朋恵
	杉本 達哉
客員研究員	伊藤 美千代
	大城 怜
	大野 真美
	加藤 優衣
	佐藤 伊織
	戸部 浩美
	鈴木 征吾

家族看護学教室年報 第2号

発行年月 令和6年5月31日

発行責任者 東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻家族看護学分野
東京大学医学部健康総合科学科家族看護学教室

Tel : 03-5841-3556 / Fax : 03-3818-2950

表紙色：すみれ、花言葉は「誠実・謙虚」